

仮名文書の形容詞(一)

——高頻度形容詞「なし」「おなじ」「かしこし」——

辛 島 美 絵

(一九九七年九月二四日受理)

一 はじめに

本稿は、仮名文書の国語学的研究の一環としておこなった仮名文書の形容詞についての報告と考察であり、これまでの副詞・動詞・助動詞等における考察に続くものである。古文書、仮名文書の国語学的研究の必要性や重要性については拙稿^(注1)を参照されたい。

形容詞の調査から仮名文書の国語学的性格を考えるための方法としては

- ①使用頻度の高い形容詞から仮名文書の特色を探る。
- ②仮名文書の種類(下達、上申、証文、書状、神仏関係)ごとに使用されている形容詞を比較、検討する。

- ③他の文献の形容詞語彙と比較、検討する。
 - ④仮名文書に独特な形容詞語彙について語誌的考察を行う。
 - ⑤漢字書きの古文書の形容詞と比較、検討する。
 - ⑥仮名文書内で他の形容形式である形容動詞、また副詞などと比較検討する。
- 等々が考えられるが、②③⑥についての詳細な検討は別稿に譲り、本稿では、①を中心に②③の観点も取入れながら報告したいと思う。

二 調査対象と方法

調査にあたっては『鎌倉遺文 古文書編』^(注2)(一巻～四二巻)所収の仮名文書を対象として、そこに使用される形容詞の全

数調査をおこなった。テキストには文書の原本を使用するのが理想であることはいうまでもないが、対象が大きいため、労力的な面から、また年代毎の変化が見やすいという点でも、編年形式で古文書を収集、編纂した本書を利用した。しかし、本稿で引用した用例については可能なかぎり原本の写真や東京大学史料編纂所蔵の影写本で表記を確認するようにつとめ、写真版で確認できたものは「写真」、影写本で確認できたものは「影写」のごとく用例出典部の末尾に記した。

仮名書きの文書といっても仮名だけで書かれているものは少なく、各文書における仮名と漢字の割合は様々であるが、ここでは仮名が少しでも交じっていれば調査対象とし、調査対象文書中では漢字書きであっても形容詞と認められるものは採取した。その結果、調査対象となった仮名文書は五九〇〇通、採取した形容詞の述べ語数は一二八六六語で、その語彙一覧が〈別表1〉である。表の最上段の「下達」以下の項目は文書の種類別の分類である。公文書を差出人と受取人の関係から下達文書（御教書や下文等のように上位者の命令・意志などを下位者に伝えるための文書）と上申文書（申文、訴陳状等のように下位者が上位者に差し出す文書）に分け、それ以外の文書を証文、書状、神仏に奉る文書に分けている。また、〈別表2〉は『鎌倉遺文』の仮名文書の形容詞を頻度

の高い順に二〇語まであげ、平安・鎌倉時代の他の資料での頻度と比較したものである。^(注3)表中の〈順位〉欄は各資料内における頻度順を示し、〈%〉欄は見出し語の頻度数が各文献の全形容詞頻度数に対して占める百分率を示している。この率を見ると、第六位と八、九、十位の「よし」「おおし／多」「ふかし」「めでたし」などは仮名文書以外の文献でも高いことが分かるが、これに対して、一位から五位の「なし」「おなじ」「かしこし」「がたし／接尾語」「ながし」と七位の「くわし」は他の文献に比べてかなり高く、仮名文書における特徴的な形容詞と見ることが出来る。よって、本稿では、仮名文書の特徴と目されるこれらの高頻度の形容詞のうち、まず「なし」「おなじ」「かしこし」について、その使用状況を報告したい。残りの高頻度語「がたし／接尾語」「ながし」「くわし」については次稿で報告する予定である。

三 「なし」

〈別表2〉に示したように「なし」は仮名文書の形容詞中、その頻度数が一位の語であり、なによりも使用頻度の多さに特色がある。同表の〈%〉の欄を見れば「なし」の形容詞語彙量全体に対する比率が四分の一近くに上ることがわかるだ

ろう。もちろん、他のほとんどの文献でも「なし」は頻度一位の語ではあるが、これほど高い割合は占めない。特に、証文、下達、神仏といった類の仮名文書では割合が高く、各文書類の形容詞の三分の一を占めている（〈別表3〉参照）。最も基本的な形容詞である「なし」の全形容詞に占める割合の高さは、逆に「なし」以外の形容詞の貧弱さを示すと考えてよいだろう。

次に注目すべきは、命令形が多いことである。

①右所、沙汰人百姓等よろしくれうちして、ゐしつする事なかれ。よつて仰處如件。

〈承久三（一二二二）年八月一三日 広沢某下文案 近江比

牟禮八幡神社文書 五卷二七九八号三五頁（注4） 影写〉

②かるきとかによりて、おもきとかをあたる事なかれ。領所寺用つゐやすへからす。庄民をわつらハしむる事なかれ。

〈文永九（一二七二）年八月 源実朝室（坊門信清女）置文

山城大通寺文書 一五卷一一〇九三号一五頁 影写〉

③鷲目一貫文送給了。御心さしの候へは、申候そ。よくふかき御房とおほしめす事なかれ。佛にやすくとなる事の候そ。をしへまいらせ候はん。

〈弘安三（一二一八〇）年二月二七日 上野殿宛日蓮書状

富士大石寺藏興師本 一九卷一四二二三号一三六頁 『昭

和定本日蓮聖人遺文（注5）』一八二八頁〉

右のように使われるが、これは古文書が宛所（差し出す相手）を持つことによる特色である。文書の種類別に見ると特に下達文書で《なかれ》の割合が高い（〈別表4〉参照）。下達文書は下位の者に命令を下す機会が多いため、特にこの傾向が強いのだと思われる。

また、終止形が三〇%近くを占めることも、仮名文書の文體と関わる大きな特色である。「なし」は他の文献でも終止形の割合が高い形容詞ではあるが、仮名文書では上申、書状、神仏の各文書できわだって高い値を呈している（〈別表4〉参照）。しかも、これらの終止形は九割がた終止法、すなわち言い切りで用いられ、助詞「と」「など」「や」等が続いて引用句をなしたり、詠嘆の意を添えたりするものは少ない。ことに上申文書では半分以上が終止形で占められ、九八%が言い切りで用いられることは注目に値する。これらは注文といわれる物品や人数を明細書きにした上申文書で特に多用される。たとえば

④記録

東大寺大佛殿御常燈料所田島等事

（中略）

一段伊賀 本地子五斗五升

作順覚房

アラマキノ升、數米トルマシ、歳末伊賀炭一籠、
所當内他所公事無之、

一段伊賀 本地子四斗八升 作善定房

升ハ作人持来、伊賀八合ニスコシ大也、所當内他
所公事無之、

(以下略)

〈永仁二(二二九四)年三月 東大寺大仏燈油料田注文 東
大寺文書 二四卷一八五一七号一三三頁〉

⑤ひこのくにあそ御しやう内みなみさかなしの

てんちけみの事、元徳二年かのへ五月六日

合

一わしやうめんけこうまち

一所 一丁内一たんこれなし

上おたき

(中略)

一せきてかなごりのめん

一所 一丁内二丈これなし

いや二郎入道

ろく三郎入道

(以下略)

〈元徳二(二三三二)年五月一〇日 肥後阿蘇莊南坂梨郷田

畠坪付注文案 肥後阿蘇文書 四〇卷三一〇三七号四七頁

影写〉

の如くである。言い切りの《なし》は、このようにシンプル
な文体の形成に貢献しており、仮名文書の文章の簡潔さを示

す一つの指標だと見ることができ。

最後に、「なし」の一割以上が特定の名詞、すなわち「違乱」
「相違」「妨げ」「退転」「煩い」に下接するという現象につい
て述べる(〈別表5〉参照)。重要なのは、仮名文書ではこれ
らの語に下接する「なし」の大部分が定型の文型——相続や
支配に関する行為の正当性を強調するためのいわゆる決まり
文句——中で用いられ、その中では「違乱」「相違」「妨げ」
「退転」「煩い」の各語が相互に入れ替え可能であるというこ
とである。これは証文において顕著に見られる傾向で、用例
の七割は証文に集中している。そして証文のなかでも特に讓
状に多い。以下に主な文型のパターンを挙げる。波線を付し
たのは「違乱なし」「相違なし」「妨げなし」「退転なし」「煩
いなし」の修飾する対象(何に対して「くなし」なのか)で
ある。

(ア) 「…なく…すべし」型

⑥右、めんくくのゆつり状をまほりて、いらんなくちきやう
すへし。もしこのむねをそむいて、いらんあらは、ふけう
の人たるへきもの也。よてゆつり状如件。

〈嘉元三(一三〇五)年五月八日 長井長家讓状案 小杉本
淡路古文書 二九卷二二二〇三号一四二頁〉

⑦しゝ、そんくゝにいたるまで、さういなくちきやうすへし。
のちのために、しひつのゆつりしやうかくのことし。

〈元亨三（一三三三）年三月二日 尼道信讓状案 山形大
学蔵中條家文書 三六卷二八三五九号三四七頁〉

⑧せんするところ、とくしゆまろひらやまとのゝてを申のけ、
いそぎ申給ハリ、たいてんなうちきやうすへし。もしこの
しやうをそむき、いらん申しそん候ハン物ハ、れんねんか
しそんにあるへからす。

〈嘉曆四（二三三九）年一月二五日 尼れんねん讓状 薩藩
旧記前編一五 三九卷三〇四九九号一五〇頁〉

⑨かのところハ、與一資光か外せき重代所領也。何なるしん
るい出来、いらんをなすというとも、次第證文等めいはく
のうへハ、わつらひなくなく知行すへく候。仍讓状如件。

〈正中三（一三二六）年五月二七日 曾我光称光頼讓状 陸
奥齋藤文書 三八卷二九四八四号一一〇頁 影写本により
「等」を補う〉

⑩右、又五郎時つなニゆつりわたすところなり。このしやう
をせうもんとして、たのさまたけなく、ちきやうすへし。
よてのちのために、しやう如件。

〈正安四（一二〇二）年五月二四日 深堀時願・時通連署讓
状 肥前深堀家文書 二八卷二一〇七九号九頁 写真〉

⑪この御ふみせうもんとして、性真房永代をかきりて、さう
ゐなくりやうち候へし。のちのせうもんのために、こまか
にかき候也。

〈文永一〇（一二七三）年一月二九日 某書状 山城三聖寺
文書 一五卷一一一八五号六三頁 影写〉

⑫…ゑいたいをかきて、ゆつりわたしたてまつるところ、し
ちなり。たのさまたけなく、りやうちあるへく候。よてこ
日のために、せうもんのしやう、くたんのことし。

〈建治元（一二七五）年一〇月三日 ふつけう讓状案 薩摩
山田家譜 一六卷一二〇四一号一二四頁〉

（イ）「…なく…すべき状、くだんのごとし」型

⑬たかちをのしやうのしうしやのかんぬしむねなをかさいけ
の事、はやく、ちとうくないさゑもんか正月十六日のけち
にまかせて、いこんさをいなく、しんたいりやうさうすへ
きしやう、りやうけ、こうかへほうけんの御はうの仰せに
よて、けち如件。

〈文永一二（一二七五）年一月一九日 領家某下知状案 日
向田部文書 一五卷一一七九五号三四九頁 写真〉

⑭ゆつりわたす所りやうの事。…仍子孫にいたるまで、
さうゐなく、りやうちすへき状如件。

〈文永五(一二六八)年五月三〇日 源頼有所領讓状写 岩松新田文書 一三卷一〇二五〇号三九二頁〉

⑮ ゆつりわたすひせんのかせの御しやうのうちとくなかミやうの事。∴。よていろんわつらいなく、ちきやうせしむへきゆつりしやう、くたんのことし。

〈永仁三(一二九五)年三月六日 藤原幸資讓状 肥前大川文書 二四卷一八七七二号二四〇頁 影写〉

⑯ 右、件家職者、相伝之下人たるニよて、もとのことく、万雑公事とゝめて、あてたふところ也。∴。仍他さまたけなく、りやうちすへき状如件。

〈弘安元(一二七八)年一月二〇日 某下文 筑後梅津文書 一八卷一三二七六号一八頁 影写〉

⑰ 右、件ところハ、明賀さうてんのりやう也。しかるあひた、∴。□位房琳蔽ニ、えいたいをかきて、ゆつりわたすところ也。よてたのさまたけなく、さうてんせしむへき状如件。

〈弘安六(一二八三)年一月二二日 明賀所領讓状案 薩摩二階堂文書 二〇卷一五〇〇九号九八頁 影写〉

(ウ) (ア)(イ)で上接語が相互に重ねて用いられた型

⑱ あはせて千そくかり、いらんなくちきやうすへし。けんへい六かやしきそへは、いらんわつらひなく、ちきやうすへ

し。

〈正中二(一二三五)年一月一七日 尼如通讓状案 色部文書古案記録草案 三八卷二九二二三号一一頁〉

⑲ みきくたんの田ち・くわうや・下人ハ、ちよくまかは、ゆつりあたうるところしちなり。いらんさういなく、りやうちし給へき状如件。

〈元応二(一二三〇)年一月二五日 隅田信教讓状案 紀伊葛原家文書 三六卷二七六〇九号三四頁 写真〉

(エ) 「(いまに) ∴なし」型

⑳ くたんのところくは、をくいりの御かせんとき、こうれんくんこうのしやうニ、こたいしやうとのより給て、いまにいらんなし。

〈延応元(一二三九)年六月 公蓮(橘公業)讓状案 肥前小鹿島文書 八卷五四四六号五三頁 写真〉

㉑ 右、件地ハ、ひくに恵眼相伝の私領として、知行いまに無さ違。

〈元弘元(一二三二)年一月六日 尼ゑけん房地売券 雨森善四郎所蔵文書 四〇卷三一六一号三一二頁 影写〉

㉒ 七月十日・十一日御祭大使役之事。∴。常陸大掾被許内昇殿、賜官途為重役、∴令勤仕御祭者也。其後∴七ケ年一度

為^{シテ}七郷巡役相勤之、于今無退^ム転。

〈乾元二（一三〇三）年 常陸鹿島社青馬並七月御祭大使役
之事實 常陸鹿島神宮文書 二八卷二一六一三三三四頁
写真〉

②③右、かの所ハ、せんそさうてんのりやうたり。よてたのさ
またけなし。

〈弘長二（一二六二）年八月二八日 覚智（岩松時兼）所領
讓状案 岩松新田文書 一二卷八八六一号二一四頁〉

（オ） 「…なく候」型

②④このちハ、すけのりかをうちすほきの三郎入たうめうしん
のてより、ちきにゆつりゑて候ほとに、さうてんさをいな
く候。

〈嘉曆三（一二三二）年三月二一日 越智資草屋地売券 山
城大徳寺文書 三九卷三〇二〇一号三五頁 影写〉

②⑤この庄も、四代さうてんのあいた、つゆわつらひなく候。
〈天福二（一二三四）年六月四日 藤原時□所領讓状 諸国
庄保文書 七卷四六六九号一二九頁〉

（カ） 「…なき所（地、物）也」型

②⑥右、くたんのちハ、沙弥唯蓮かさうてんのちなり。つたへ

てのち、いさゝかもゐらんなきところなり。しかるをいま、
ほんけん四まいをあひくして、ちやく女忍阿弥陀佛二なか
くゆつりわたすところ実也。

〈寛元二（一二四四）年六月一五日 沙弥唯蓮家地讓状 山
城寶鏡寺文書 九卷六三二八号九五頁 影写〉

②⑦右、件のでんはくハ、さいあみたふのてより、くそ□ゆ
つりゑて、ちうたいさうてんさうゐなきちなり。…□お
もあひそへて、ミつかとのおとはう御せんを□し申候て、
やうたいをかきて、ゆつりあたふと□ろしつなり。

〈正中二（一二三五）年三月七日 池田尼西阿讓状 豊後松
成文書 三七卷二九〇三六号二九七頁 写真〉

②⑧右、田ハ、…こけふんとして、ゑたいりやうせんにあまこ
せんしんしやうはうに、ゆつりまいらするところなり。…
たゝし、ほんせうもんハ、文永二ねん四条きやうこくのす
へに、せうまうのとき、ふちつすといへとも、としころち
きやうさうゐなきのものなり。よて、のちのために、ゆつ
りしやう、くたんのことし。

〈文永九（一二七二）年一〇月二一日 道智田地讓状 白河
本東寺文書一六三 一五卷一一四三三号一七八頁 写真〉

②⑨うりわたす九てうまめ田のうちのたいたんの事。
みきこの田ハ、さうてんのしりやうにて、わつらいなきも

の也。よてせうもんくして、ちうらいかの御はうに、せに
一五くわんに、なかくうりわたすなり。

〈嘉元二(一三〇四)年二月一〇日 平氏女田地売券 東寺
百合文書モ 二八卷二一七四四号二九二頁〉

以上、(ア)(イ)(ウ)は「べし」が後続し、所領・所職を
正当に知行、領掌することを命令するものであるが、この文
型で用いられるのは全一八五例で、「違乱なし」「相違なし」
「妨げなし」「退転なし」「煩いなし」の用例の半数を占める。
(エ)(オ)(カ)は、所領、所職やそれらの領掌、知行がずつ
と安泰であったことを証言する文句であり、全九九例である。
すなわち、前掲の上接語を持つ「なし」三八一例中の二八四
例(約八割)が、定型句として、《波線の支配や相統・所有に
関する行為が正当・無事である(べき)こと》を強調するた
めに使われていることがわかるだろう。

それぞれの上接語の意義に差があることは言うまでもない
が、如上のような文型を観察すると、はたしてどの程度まで
各上接語の意義の相違が意識され、どれほどの意識を持って
各語が選択されたのかは疑わしい。むしろ、細かな相違は捨
象され、証文の一形式として受け継がれ、書き継がれた語型
だと見るべきだろう。^(注6) 語誌的な見地からこれらの語型の成立

について考察することが必要だが別稿に譲る。漢字ばかりで
書かれた古文書における用例や他文献とも比較考証して、語
誌的考察の稿で改めて報告したい。

四 「おなじ」

頻度数第二位は「おなじ」である。他の文献でも頻度が高
い部類の語ではあるが、仮名文書では全形容詞用例の一割強
を占めている点、突出している(〈別表2〉参照)。すなわち、
前述の「なし」とあわせると形容詞全体の三分の一以上を占
めることになる。仮名文書の形容詞の根幹は「なし」と「お
なじ」であるといえそうだ。

文書類別に頻度数と全形容詞中の割合を見ると、上申文書、
証文、下達文書に特色的にあらわれる形容詞だということが
分かる(〈別表3〉参照)。上申文書では地子帳、坪付帳、実
検帳、算用状、注進状、目録などの税金や収益、物品の分配
等を計算したり羅列したりする文書に、証文では大間状のよ
うに次々と事項を並べていく形式の譲状等に多い。

①注進

任寄進状可遂社家検注津守保田地坪付目録事

合

一所二反二丈 下おと

(中略)

一所二反三、 あきたその

一所二反三、 おなし

(中略)

一所三反三、 山下のまへ

一所一丁 おなし所

一所八反 おなし所

一所五反 おなし所ひんかし

(以下略)

〔建仁二(一二〇二)年一月三日 肥後津守保田地坪付写

肥後阿蘇文書 三卷一三二七号七二頁 写真〕

②親父依仰牛御前ところにわけわたしまいらする人吉庄南方

田地在家并芋桑等事

合

(中略)

一、りやうけ御方ニわたさるへきものらの事

くわしろのきぬ六丈内おなしきわた七十まい・せいかうのいと

二ふん・ちしのしろを五りやう・すなうのぬの二丈、この

ほかのまんさうくしニおいてハ、きしやうてんのいすにま

かせてきたせらるへし。

(以下略)

〔建長四(一二五二)年三月二五日 相良頼俊等連署去状案

肥前相良家文書 一〇卷七四一八号三〇六頁 影写〕

③御逆修 建保三年五月廿四日壬午はしまる、

(中略)

一、廿七日二七日

阿弥陀さう一尺五寸一躰ふしたんけい、うんけい、いかこ、

(中略)

おなしき日別當のりともものひき物

(以下略)

〔建保三(一二二五)年五月 後鳥羽上皇逆修僧名等目錄

伏見宮記録五八 四卷二一六三号一七二頁 謄写〕

④注進

豊後國阿南庄松富名号狭間村半分新田畠実検事

合

一、來鉢井窪分

田代

くちら 一所三百歩 一斗五升代 五郎

同しり 一所六十歩 同 尺迦太郎

おき 一所三百卅歩 同 ミやとう二郎

(以下略)

〔乾元二（一三〇三）年五月〕豊後国阿南庄松富名半分新

田畠実検帳 筑後大友文書 二八卷二一五四号一九七頁

影写

⑤さつまのくにさつまこほりなりとみのミやうの内、さいうんかちきやうふんをさしわけて、しそく四らう、同しよのこともに、せんにちゆつるとゆゑとも、四らういちこのゝちは、さいうんかまこ、みろく丸ちきやうすへきところ也。すいてんあふミたのつほ、同さいへんをくわうるちやう、なかたのしもの五反、：

〔正中三（一三二六）年九月八日 西雲讓状 薩摩三角利貞

文書 三八卷二九四八七号一一頁 写真〕

右のように、前に述べた内容の重複を避け、文を簡潔かつ事務的にするのに貢献している。④⑤のように送り仮名のない漢字書きの「同」は音読された可能性も皆無ではないが、同様の形式を持つ①②のような仮名書きの例を参考にして用例として採用した。このような漢字のみの「同」は「おなじ」全用例の七割以上にものぼり、仮名の中に交じってあたかも繰り返し符号のように記号的に用いられている。簡潔に物品や金銭を記録し、報告する書式にふさわしい用語、用字であったものと思われる。

体言に続く形は①のような《おなじ》と②③のような《お

なじき》の両形が見える。書状では八割以上が《おなじ》であるが、下達、証文、神仏に奉る文書では《おなじき》が優勢である（別表6）。「文書の種類別」の項参照）。ちなみに上申文書でも①の（肥後津守保田地坪付写）に《おなじ》が二例集中していて異例だが、その他では半数以上が《おなじき》である。一方、文書の使用文字——平仮名ばかりで書かれた文書、片仮名、あるいは漢字交じりで書かれた文書など——と両形との使い分けには特別な関係は見出せない（別表6）。「文字別」の項参照）。一般に和文体では《おなじ》、訓読系では《おなじき》を使う傾向があるといわれるが、上述の事物の羅列を主体とする文書では、たとえ平仮名ばかりで書かれた文書でも《おなじき》が好まれたようである。

また、室町時代以降に接続詞として活躍するへならびに《および》の意味の《おなじく》が元亨元（一三二一）年三月三日の肥後阿蘇社進納物注文に以下のように見えている。

⑥肥後国阿蘇大明神宮進ミたてまつる物々次第注文之事

（中略）

一、たをとこ、おなしくたをんな

一、水火王めん二めん、にんたうといふ

一、作牛一ひき

一、傳樂鼓一かけ、おなしくてんかく九人しやうそく、あ

やいかさ、これにハミな大しんほうをせめ申て、三十
三ねんに一度かへ申ところ也

（中略）

一、投拂刀、はまのふん、かたな三十三、ようとう六百文、
ふゆのふん、かたな三十三、おなしくようとう六百文、
已上りやう度のふん、かたな六十六、ようとう一貫二
ひやくもん

〈阿蘇文書写 三六卷二七七四七号八四頁 写真〉

ただし、この三例のみであり、近世に作成された転写本にお
ける例であるため、疑いが残る。

五 「かしこし」

第三位は「かしこし」である。これが仮名文書で高頻度語
としてあるのは

①この文にて、人々おなし御ころに候へし。あなかしこ
く。

〈弘長二（一二六二）年？〉十一月二日 ひとちの人々
宛親鸞書状 一二卷八八八九号二三八頁 山城本願寺文書
『親鸞聖人真蹟集成』^{（注7）}四卷四二九頁〉

のように語幹が多用されるためである。このような語幹の例

は「かしこし」全体の約九四％にのぼる。一方、語幹以外の
「かしこし」については、〈恐れ多い〉意味では、

②かけまくもかしこきかすかの大明神のひろまへに、

〈文保二（一二三二）年二月八日 後伏見上皇告文宸筆案
宮内庁書陵部蔵 三四卷二六五四三三〇八頁〉

他、宣命、告文、願文で神に敬意を表する表現として二三例
が用いられ、〈才知がある〉意味では書状を中心に三八例が用
いられるのみである。

他の文献では「かしこし」の頻度は低く、特に仮名文書に
多用される語幹の用法は少ない（〈別表2〉参照）。会話文中
で感動詞的、陳述の副詞的に《あなかしこ》が用いられる程
度であり、使用される場面は限られている。すなわち、語幹
の「かしこし」の多用は他資料と大いに異なる特色だといえ
よう。

以下では、仮名文書における「かしこし」の語幹について、
文書の末尾で形式的な書止めの文言として使用された例、そ
れ以外の文章中で使用された例の順で解説する。

五ノ一 書止めとして使用される語幹

語幹の用例の約九割（七〇六例）は書止めの文言として使
用されたもので、これが見られる文書は書状、あるいは書状

形式の文書にほぼ限定されている（〈別表7〉参照）。すなわち、下達では院宣・女房奉書・御教書などの奉書、証文では讓状や置文、上申では申状、神仏に捧げる文書では寄進状などである。まれに契約状でも

③にしまたの事、義弘二ゝるこんなく、すゑまでも水魚のことくならんために、御さりふみ給ハリ候了ぬ。尤これ本意候。たかひ二御中の事においてハ、ふしん候ましく候。あなかしこく。

建長六年後五月四日

藤原義弘（花押）

上総法橋御房御返事

〈建長六（一二五四）年閏五月四日 藤原義弘契約状 薩摩

比志島文書 一一卷七七五七号三〇頁 影写〉

のような書状に近い形式で書かれた証文には用例が見える。

文字や文体との関係では、総じて仮名の比率の高い仮名文書に見られるが、漢字書きの部分が半分を占めるような仮名文書や漢文で書かれた部分を含みもつ仮名文書などにもかなりの用例が指摘できる。

使用者については、身分の上下や居住地域における特定の偏りは見出せないが、『鎌倉遺文』の全仮名文書の差出人の男女比と用例が見える文書のそれとを比較すると、女性の文書

における比率の方がやや高い。^(注8)

語形には次の（ア）（イ）（ウ）のような変容や、表現の型が見られる。

（ア）二回繰り返す型

（イ）語尾が《くかしこ》ではなく《くかしく》となる型

（ウ）接頭語が付く型

まず（ア）は、

④：御さた候へは、行すゑまでも、さうゐ候はしと思食れ候よし、殿下御気色候也。あなかしこく。

〈乾元二（一三〇三）年四月二三日 関白二条師忠御教書案

（としひら筆教明の房宛） 東寺百合文書ヒ 二八卷二一四

五五号一六〇頁 影写〉

のような型である。これを繰り返さない型と比べると四対七の比率で繰り返さない型が優勢である。^(注9) 文書の種類、年代、

書き手の性別、身分等による顕著な使い分の傾向は見出せないが、差出人を個別に見ると、使用例数が多いこともあって、

金沢貞頭、日蓮、親鸞には一定した使用傾向が看取される。

金沢貞頭では彼の全用例六九例すべて繰り返さない型を用いるが、日蓮では全四四例（二二組）すべて二回型である。そして親鸞も全六五例のうち三例を除いてはみな二回型である。個人的な嗜好かと思われるが、日蓮、親鸞については、

五ノ二で述べるような説法的な内容との関係も考えられる。

次に（イ）は④や

⑤もしのために、かきをく所也。かしく。

〈弘長三（一二六三）年一〇月八日 熊谷直時置文 長門熊

谷家文書 一二卷八九九八号二九四頁 写真〉

のように末尾が《くく》と変化している型で、一三四例見える。一方①③のような《くこ》型は五三五例で『鎌倉遺文』

の活字で見るとかぎりはこちらが優性である（残り三七例は漢字書きの「穴賢」）。これも使い分けに文書や差出人との関係は見出しがたく、同じ人物が両方の型を用いる場合も少なくない。ただし「久」と「己」のくずし字は紛れやすく、

⑥ゆかしくこそ候へ。あなかしこ。

〈文永四（一二六七）年 九月七日 わかさ殿宛惠信尼書

状 一三卷九七六三号二八二頁 写真により「あなかしこ

く」とあるのを改めた〉

の惠信尼の書状の「こ」も、

⑦さためて御心へハ候はむ、御わすれ候へからす候。あなかしく。

〈建長八（一二五六）年九月一五日 わかさ殿宛惠信書状

一一卷八〇四一号一九三頁 写真により「あなかしくく」とあるのを改めた〉

の「く」を見ると、非常に「く」に近く見えてくるといったふうであるから、上記の数字も原本の表記の確認作業を経ると大幅な修正が必要になると思われる。正確には写真ではなく原本で逐一調査して、その使い分けの傾向を見る必要があるが、写真で「く」と「こ」の判別困難な例に接するにつけ、当時の人々がどれほどの意識をもって区別していたのか甚だ疑わしく感じられる。

次に（ウ）の接頭語が付く型であるが、ほぼすべての用例がこれにあたる。接頭語のほとんどは前掲①③④⑥⑦のように《あな》が上接した例である。また『平安遺文 古文書編』^{（注11）}の仮名文書でもみな《あなかしこ》である。真下三郎氏の御指摘^{（注12）}に加えて、このような用例の面からも接頭語《あな》が付く型が書止めとしては本来的なものだと考えてよいだろう。一方、語幹のみの型は⑤や、

⑧このよしを申させおハしますへく候。かしこ。

〈年末詳 室町院（暉子内親王）女房奉書 兼仲卿記建治二年一一・一二月卷裏文書 一六卷一二六三七号三八九頁 写真では末尾の「こ」に当る部分が虫食いで判読不明〉

⑨のこり候するようとうをハ、もんそまいらせ候時、給候へく候。かしく。

〈弘長二（一二六二）年一一月一七日 寛弘書状 山城大徳

寺文書 一二卷八八九六号二四〇頁 影写

⑩いつそや給りて候しくたくすりか、ちと給はりたく候。かしく。

〈乾元二(一三〇三)年以前一月 忍性書状 賜蘆文庫文書 所収極楽寺文書 二八卷二一五七三号二二二頁 影写〉

⑪たゝし、ふしハ、やとわる□□^{注13}にて、かき候ぬ。かしく。

〈徳治二(一三〇七)年二月一八日 よしうち讓状 伊勢御

巫家退蔵文庫文書 三〇卷二二八六二号九四頁 写真〉

⑫そんふんを、くない入道ニくわしくおほせをふくめらるへく候。かしく。

〈元応元(一二三九)年一月二九日 西郷入道・八田六郎

宛少貳貞頼書状 享保八年編宗家御判物控與良郡 三五卷

二七三二四号二五三頁 九州大学九州文化史研究所の謄写

本の写真により「かしこ」とあるのを改めた

他、『鎌倉遺文』では計一七例が見える。《〜こ》型優勢の中

にあつて、語幹のみの型は《〜く》型が多い。また、すべて繰り返し返さない型であるのは《あな》を省略しようとする心理と強調し二度繰り返し返そうとする心理が相容れないためだと考えられる。

語幹のみの用例は後に増加してゆくが、右の用例は広い地域や身分にわたっているから、実際には一三世紀にはかなり

一般化していたのではないかと推察される。しかし、近代につながる女性の書簡用語としての固定化はまだ見られない。

また接頭語が付く型では《あな》の他に、《めでたく》が付いた「めでたくかしく」が『鎌倉遺文』には

⑬返〜おほへ候へ。めてたくかしく。

〈正元元(一二五九)年?〉下野局消息 石清水文書 一巻八四五六号三七六頁

の如く一例見えているが、この例は影写本では「めでたく候、〜」と読める。^{注13}また《あらあら》が付いた

⑭あこあんとのよりの御ふみまいらせ候。あら〜かしく。

〈年未詳一月八日 定信書状 興福寺旧蔵弘長二年草本三十三過本作法裏文書 一二卷八六六〇号七九頁

も一例見えるが、原本の表記は未確認である。

五ノ二 書止め以外で使用される語幹

語幹が書止めではなく文中で用いられた例は五一例ある。

(ア)二回型が四六例(二三組)、(イ)《〜こ》型が三〇例で、(ウ)接頭語《あな》を全用例が冠している。このうち

⑮あわれみをなし、かなしむこゝろをもつへしとこそ、聖人はおほせことありしか、あなかしこ〜、佛恩のふかきこととは懈慢・辺地に往生し、疑城・胎宮に往生するたにも、

弥陀の御ちかひのなかに、第十九・第廿の願の御あわれみにてこそ不可思議のたのしみにあふことにて候へ。

〈建長七（一二五五）年一〇月三日 親鸞書状 一一卷七九

〇五号一〇一頁 山城本願寺蔵 『親真蹟』四卷四〇七頁

他二例（一組）は「佛恩」に対して畏まる気持ちを表した例だが、他はみなへ決してやへ絶対にて等の意味合いで、以下にくる命令や禁止の表現を強調するものである。たとえば

⑩カヤウニコマカニカキツケテ申候へトモ、返々ハハカリ

オモヒテ候ナリ。アナカシコく、御ヒロフアルマシク候。

御ラムシコ、ロエサセタマヒテノチニハ、トクくヒキヤラセタマフヘク候。アナカシコく。

〈年末詳三月一四日 大胡太郎実秀宛法然書状 西方指南

抄 三卷一四六〇号一六三頁 『親真蹟』六卷六一八頁

⑪ヨクくツシムヘキコトナリ、アナカシコく、カヤウノコトヲコ、ロヘヌ人々ハ、ソノコトナキコトヲ、マフシアハレテサフラフ、ヨクくツシミタマフヘシ。

〈年末詳二月三日 親鸞書状 親鸞聖人御消息集 一一卷

八〇三三号一八九頁

⑫この御房たちのゆきすりにも、あなかしこく、ふし・かしまのへんへ立よるへからすと申せとも、いかか候らんと

をほつかなし。

〈建治元（一二七五）年七月二二日 高橋入道宛日蓮書状

一六卷一一九五六号七五頁 『日蓮聖人真蹟集成』四卷一

七三頁

⑬わか御とくふんにハ、あつかり所のとくふんを、せさせをハしますへく候。あなかしこく、りやうけのとくふん、けた
いなくさたしまいらせられ候へく候。けたい候はうらみ
まいらせ候はんするに候。

〔正嘉元（一二五七）年九月一七日 某讓状案 久我家文書

一一卷八一五〇号二四三頁

⑭一、百人ノ親昵ノ殿原アリトモ、其中ニ一人イト心ノ程知
ラサラン人交リタラハ、穴賢、人ノウヘラ悪云ヘカラス。

大方人ノ上ヲ云事アルヘカラス。我カ若党ノイハンヲモ禁

制スヘシ。

〔弘長元（一二六一）年以前 北条重時消息 大和天理図書

館蔵 一二卷八七三一号一二四頁

等である。

さて、佐竹昭宏氏^{（注15）}は蓮如の『御文』の「あなかしこ」につ
いてへ止め詞が命令の語法のあとでは陳述副詞の機能を持ち、
その効果を計算に入れながら『御文』は書かれたと指摘さ
れたが、実は『御文』にかぎらず、仮名文書には禁止や命令

の後に書止めの「あなかしこ」がきて、陳述の副詞さながら前の文を強調しているように感じられる例が非常に多い。⑩の二つの《アナカシコ》を比べて頂きたい。この部分は文書の最後部であるから後の《アナカシコ》は書止めの文言と見るべきだが、前と後からと双方で《手紙を誰にも見せるな》という挟まれた文章の内容を強調しているかのようである。このような例は他にも

⑪くハしきことは、けんニのせたり。たにんのさまたけあるへからす。あなかしこ。

〈文永四（一二六七）年二月一日 慈信宛せうあみたふつ讓状案 山城本願寺文書 一三卷九六四九号二三五頁〉

⑫ことにたしかに候ハむために、権亮ならひに母儀二人のはむをそへ候へハ、ゆめくたのさまたけ候ましき也。あなかしこ。

〈文永四（一二六七）年二月二六日 へたうのすけ宛観空（安居院実忠）讓状案 山城大徳寺文書 一三卷九八三九号 三一九頁〉

⑬さらく他のさまたけあるへからす。あなかしこ。

〈建久一〇（一一九九）年三月二二日 民部少輔隆範宛藤原隆信讓状 播磨松雲寺文書 二卷一〇四三号三三九頁 影写〉

⑭このふみ、ゆめくひろ□すへからす。あなかしこ。

〈年末詳 七月三日 後鳥羽上皇書状 武蔵原富太郎氏藏 五卷二七七一号二二頁〉

⑮のちのさまたけ候へからす。あなかしこ。

〈承久二（一二二〇）年八月一〇日 日下部太子園借文案 薩摩長谷場文書 四卷二六三九号三九二頁 影写本により「あなかしこ」とあるのを改めた〉

⑯クレ々々短気ナル事カ不可然候。穴賢々々。

〈建永二（一二〇七）年一月一日 熊谷直実宛法然書状 信如堂縁起之写 三卷一六六三号三〇七頁〉

など枚挙に暇がない。これらの「あなかしこ」は書止めと同じ時に前文の内容を念押ししているのではないか、すくなくとも受手は命令や禁止がさらに強く働きかけられたように感じるのでないかと思うが、それは、この《禁止・命令文+あなかしこ》の形にさらに書止めの文言が付された、

⑰すへのよにハ、毗沙王殿ニゆつるへし。たのさまたけあるへからす。あなかしこ。

右、注進如件。

〈寛喜元（一二二九）年七月一九日 とくまへ宛千万法師讓状 武本為訓氏旧藏文書 六卷三八五二号一三六頁〉

⑱このまんだらを身にたちぬれば、王を武士のまほるかこ

とく、子ををやのあいするかことく、いをの水をたのむかことく、草木のあめをねかうかことく、とりの木をたのむかことく、一切の仏神等のあつまりまほり、昼夜にかけのことくまほらせ給法にて候。よくく御信用あるへし。あなかしこあなかしこ。恐恐謹言。

〔建治元（一二七五）年八月二五日 妙心尼御前宛日蓮書状 富士大石寺藏興師本 一六卷一二〇〇二号一〇六頁 〔昭定〕一一〇五頁〕

⑲此より後も、いかなる事ありとも、すこしもたゆむ事なかれ、いよくはりあけてせむへし。たとい命に及とも、すこしもひるむ事なかれ。あなかしこく。恐恐謹言。

〔建治三（一二七七）年八月二一日 兵衛志宛日蓮書状 一七卷一二八二五号一二八頁 〔日真蹟〕三卷五頁〕

のような例によつても確かめられる。別の書止めの詞がさらに付されるのは「あなかしこ」が前の禁止や命令の文に関わる概念だったからと考えるべきだろう。すなわち、鎌倉時代の仮名文書においても「あなかしこ」は、念押しや戒めを強調する意図を持って使用されたのではないかと推察されるのである。本来古文書は必要があつて用件を相手に伝えるものだから、文書の末尾に禁止・命令文がなくなつても、一通の文書全体が訴えや命令や懇願等の内容になつてゐることが多

い。仮名文書における「あなかしこ」はへ自分が相手に対し、慎み、畏まるゝ気持ちを表すと同時にへ相手が慎み、こころするゝことをも要求しうる非常に便利な書止めの文言だったのでなかつたかと思われる。実際、このような相手への働きかけ、語りかけは、古文書の言語の大きな特色といふべきものである。他の文献では「あなかしこ」は会話文中で感動詞的、陳述の副詞的に使われると述べた。会話と古文書とはいかにも掛け離れているようであるが、ともに相手に直接働きかける言語という点で共通する面をもっている。以前、古文書の対話性という特色について指摘したことがあるが、^{〔注16〕}「あなかしこ」の例を通してみてもその共通性は確かめられると思う。

また、五ノ一の（ア）で日蓮や親鸞は二回型を好む（法然についても一五例中一四例七組は二回型である）と書いたが、彼らは文中で陳述副詞的な「あなかしこ」を使うことも多い。文書の内容は法話的で、戒めや説得が随所にみえるが、蓮如と同様、啓蒙的、布教的な内容が「あなかしこ」をより要求したのかもしれない。

以上、「かしこし」は主として書状や書状形式の文書で書止めの文言として使用されること、相手に敬意を表すと同時に、

念押しの効果をもねらったのではないかと思われる例も多いこと、等について述べた。発生、意味、語形の変化等についての考察は、別稿で各語の語史を考察する際に譲る。

六 まとめ

仮名文書の形容詞は、これまで述べてきた「なし」「おなじ」と「かしこし」でその述べ語数の四割が占められる。「なし」は終止法が多用され、成句的な表現を形成し、「おなじ」は繰り返し符号的に用いられ、「かしこし」も書止めが主体であるなど、その用法は形式的、非装飾的、実用的であり、副詞的な用い方がされている場合も多かった。また、調査した仮名文書全体から見れば、これらの高頻度語ですら仮名文書の広い範囲にわたって用いられるとは言いがたく——五九〇〇通の仮名文書のうち「なし」が見出されるのは一三五四通、「おなじ」が四八五通、「かしこし」が五四〇通である——、形容詞がない、あるいはほとんど用いられない仮名文書も非常に多い。

次稿では本稿で言及しなかった「がたし／接尾語」他の特色ある高頻度形容詞について報告し、今回の調査と合わせて高頻度形容詞語彙から見た仮名文書の特色について考察する

予定である。

(注1) 「古文書による国語史研究序説」『豊太閤真蹟集』について——『文献探究』一二 一九八三年七月、「古文書語彙の性格——副詞を中心として——」(『語文研究』五七 一九八四年六月)、「国語資料としての仮名文書——鎌倉時代のオ段長音の開合と四つ仮名の混乱表記を通して——」(『国語学』一四六 一九八六年九月)、「国語資料としての仮名文書——鎌倉時代の二段活用的一段化例、ナ変の四段化例等をめぐって——」(『奥村三雄教授退官記念国語学論叢』桜楓社 一九八九年六月)、「国語資料としての仮名文書——助動詞をめぐって——」(『古代中世史論集』吉川弘文館 一九九〇年八月)、「古文書における『る・らる(被)』の特色」(『語文研究』七一 一九九二年六月)、「仮名文書の助動詞——『す・さす』『しむ』——」(『九州産業大学教養部紀要』三〇ノ二 一九九三年一二月)。また、仮名文書については、迫野虔徳『方言資料としての古文書・古記録』(平山輝男博士還暦記念会編『方言研究の問題点』明治書院 一九七〇年八月)、同『古文書にみた中世末期越後地方の音韻』(『語文研究』二二 一九六六年一〇月)、福田良輔『方言と古文書』(『解釈と鑑賞』三四ノ八 一九六九年七月) 他も参照。

(注2) 竹内理三編、東京堂出版、一九七一〜九一年刊。

(注3) 〈別表2〉の他の資料の形容詞の頻度数は以下の作品の索引や語彙表によった。平安・鎌倉時代の仮名文献、漢字仮名交じりの文献を多種の分野から選定し、利用しやすい諸先学の調査があるものは使用させていただいた。なお、各典拠の見出し語の採り方が一致しない場合等は、その資料の底本にあたり仮名文書の調査で採った見出しに合わせ、適宜例数を改める等の処置をおこなっている。また、「形容詞語幹+さ」(名詞形)の形は考察にあたっては参照したが、表からは除く

史書中古	大鏡 曾我物語 義経記 平家物語	宮島達夫・中野洋・鈴木泰・石井久雄「フ ロッピー」版古典対照語い表（笠間書院 一 九八九年九月）
軍記中世	保元物語 平治物語 平家物語 義経記 曾我物語	安部清哉・国語学ゼミ学生「中世軍記物五 作品の形容詞用例数語彙表（稿）」 （玉藻）一九一九三年六月）
説話中世	癡心集 十訓抄	高尾稔・長嶋正久「癡心集 本文・自立語 索引」（清文堂 一九八五年三月） 泉基博「十訓抄 本文と索引」（笠間書院 一九八二年二月）
隨筆中世	方丈記 徒然草	宮島達夫・中野洋・鈴木泰・石井久雄「フ ロッピー」版古典対照語い表（笠間書院 一 九八九年九月）
隨筆中古	枕草子	宮島達夫・中野洋・鈴木泰・石井久雄「フ ロッピー」版古典対照語い表（笠間書院 一 九八九年九月）
日記中世	とはすがたり 更級日記 紫式部日記	辻村敏樹「とはすがたり総索引」（笠間書院 一九九二年五月）
日記中古	土佐日記 蜻蛉日記 和泉式部日記	西端幸雄・木村雅則・志甫由紀恵「平安日 記文学総合語彙索引」（勉誠社 一九九六年 二月）
ジャンル	作品名	典 拠

た。

物語中古	伊勢物語 平中物語 大和物語 竹取物語 源氏物語	西端幸雄・木村雅則「歌物語総合語彙索引」 （勉誠社 一九九四年一月） 宮島達夫・中野洋・鈴木泰・石井久雄「フ ロッピー」版古典対照語い表（笠間書院 一 九八九年九月）
------	--------------------------------------	---

（注4）特に記さない時は『鎌倉遺文』の巻数と号数と頁数である。

（注5）立正大学日蓮教学研究所編、総本山身延久遠寺発行、一九五二〜一九五九年刊。以下「昭定」と略記する。

（注6）逆に、上接語の原義が明確で、文字どおりへ：がない」状態を表す用例は書状に多く見られる。たとえば

①昨日御経營、無雨風之煩、天氣静候之条、返々目出候。

（年未詳 劍阿書状 金沢文庫文書 三九卷三〇八五六号三二〇頁）

②関東宗論可有之由、案内仕候。法花御廣宣流布無煩候。自何事も此

へ御もてなし候ハ、悦入へく候。恐々謹言。

（正和四（一三一五）年？）三月一四日 日朗書状 相模妙頭寺文

書 三三卷二五四四九号一三七頁）

の「煩いなし」は「風雨の煩」や「法華の流布に心配」が「ない」こ

とを文字通りに表現したもので、

③この経を持申て後、退転なく十如是・自我偈を誦奉り、題目を唱へ

申候也。

（建治二（一二七六）年一月九日 松野殿宛日蓮書状 一六卷二二

五九七号三六六頁 『昭定』一二六五頁）

の「退転なし」は仏道修業に「中断」が「ない」状態をいったものである。

（注7）法蔵館、一九七三〜七四年刊。以下「親真蹟」と略記する。

（注8）今回の調査では『鎌倉遺文』の仮名文書五九〇〇通のうち差出人

が男性のものは四六五九通(八〇%)、女性のものは四五八通(八%)、不明は七八三通として処理したが、用例が見える文書は男性のものが三五三通(七〇%)、女性が六七通(一三%)、不明が八七通である。宛所の性別については調査中であるが、差出人、宛所ともに男性である文書も少なくない。ただし、皇室関係の奉書、すなわち院宣・令旨・繪旨・女房奉書(以上二五通)においては書手不明の一通を除いてはみな書手か宛所かいずれかが女性の場合に使用されている。皇室の奉書におけるこのような傾向が「かしこ」が後世女性の書簡用語として固定してゆく基盤となったのではないかと推察される。

(注9) 二回繰り返す型は一八八組(三七六例)、一回のみの型は三二九例である。

(注10) この二通は鷲尾教導『惠信尼文書の研究』(明治書院 一九二三年七月)の図版にも収録されている(⑥は図版一三、⑦は図版二)。

(注11) 竹内理三編、東京堂出版。

(注12) 『「かしこ」考』(『甲南女子大研究紀要』一一・一二号 一九七五年) 一〇〇〜一〇四頁、『書簡用語の研究』(深水社 一九八五年) 三八三〜三八八頁参照。

(注13) 「めでたくかしこ」は『貞丈雑記』の記事からして江戸時代にはじまったとする意見もある(注12論文)が、「めでたし」が書状に多用されることや、⑬をはじめ

①:行す多のためまでもおたしく、めでたく候よし、御きそくさふらふ也。めでたく〜。

〈建長四(一二五二)年 修明門院藤原重子令旨写 撰津水無瀬宮文書 一〇卷七五二二号三四四頁 影写〉

②日蓮あに此義にかはるへきや、幸なり幸なり。めでたしめてたし。又又申へく候。あなかしこ。あなかしこ。

〈文永八(一二七一)年五月七日 四条金吾女房宛日蓮書状 一四卷

一〇八二九号二七五頁 『昭定』四八四頁)

のように書状の末部や結びに用いられた例がみられることからして、その発生はそう遠い時期ではなかったのではないかと思われる。

(注14) 法蔵館、一九七六年刊。以下『日真蹟』と略記する。

(注15) 佐竹昭宏「あなかしこ」(『文学』四一ノ五 一九七三年五月)

(注16) 古文書の対話性という特色については拙稿「る・らる」の尊敬用法の発生と展開―古文書他の用例から―(『国語学』一七二 一九九三年三月)や「記録資料(平安・鎌倉―「る・らる」を例に―)(『国文学―解釈と教材の研究』三九ノ一〇 一九九四年九月)等で助動詞「る・らる」の発生の問題について考察した際にも言及しているので参照されたい。

【付記】本稿は、平成九年度文部省科学研究費補助金奨励研究(A)「中世仮名文書の国語史的研究―形容詞・形容動詞の調査から―」の成果の一部である。

また、古文書の写真や影写本の閲覧に際し御高配を賜りました東京大学史料編纂所に厚くお礼申し上げます。

仮名文書の形容詞 (一)

〈別表1〉 仮名文書の形容詞語彙一覧

見出し語	活用	下達	上申	証文	書状	神仏	合計
あいなし	ク	0	0	0	1	0	1
あえなし	ク	0	0	0	2	0	2
あおし	ク	0	0	0	4	1	5
あかし／赤	ク	0	1	0	4	0	5
あかし／明	ク	0	0	0	1	0	1
あかなし	ク	0	0	0	1	0	1
あきらけし	ク	0	0	0	0	1	1
あさし	ク	0	7	16	41	3	67
あさまし	シク	1	12	3	113	1	130
あし	シク	6	11	8	120	0	145
あし?わるし?	クシク	0	0	0	12	0	12
あじきなし	ク	0	0	0	2	2	4
あたらし／新	シク	0	0	1	6	1	8
あつし／厚	ク	5	7	3	21	7	43
あつし／暑	ク	0	0	0	7	1	8
あつし／熱	ク	0	0	0	6	0	6
あとかたなし	ク	1	5	0	1	0	7
あとかたもなし	ク	0	0	0	2	0	2
あとなし	ク	0	0	0	1	0	1
あぶなし	ク	0	1	1	5	0	7
あまし	ク	0	0	0	3	0	3
あまねし	ク	1	4	1	16	8	30
あやうし	ク	0	1	0	12	1	14
あやおし	ク	0	0	0	1	0	1
あやし／怪	シク	0	0	0	8	0	8
あやし／賤	シク	0	0	0	1	0	1
あやなし	ク	0	0	3	2	0	5
あらかし	ク	0	0	0	1	0	1
あらし	ク	0	1	0	10	0	11
あらまし	シク	0	0	0	1	0	1
あらまほし	シク	0	0	0	1	0	1
ありがたし	ク	0	3	2	97	1	103
あわいなし	ク	0	1	0	0	0	1
あわれし	シク	0	0	0	1	0	1
いうかいしなし	シク	0	0	1	0	0	1
いうかいなし	ク	0	0	2	10	0	12
いうばかりなし	ク	0	0	0	2	0	2
いかがし	シク	0	0	0	1	0	1
いかめし	シク	0	0	0	3	0	3
いくほどなし	ク	0	0	4	4	1	9
いさぎよし	ク	0	0	0	5	0	5
いそがし	シク	0	0	0	1	0	1
いたいたし	シク	0	0	0	2	0	2
いたし／甚	ク	1	4	0	49	0	54
いたし／痛	ク	0	0	0	7	1	8
いたまし	シク	0	1	0	0	0	1
いたわし	シク	0	0	0	22	0	22
いつくし	シク	0	1	0	1	0	2
いつとなし	ク	0	0	0	9	1	10
いとおし	シク	1	3	12	23	0	39
いとけなし	ク	0	2	0	2	0	4
いとし	シク	0	0	0	0	1	1
いとしなし	ク	0	0	0	1	0	1
いとまなし	ク	0	0	0	1	0	1
いとわし	シク	0	0	0	2	0	2
いぶかし	シク	0	0	0	1	0	1
いぶせし	ク	0	0	0	12	0	12
いまいまし	シク	0	0	0	4	0	4
いまめがわし	シク	0	0	0	1	0	1
いまわし	シク	0	0	0	1	0	1
いみじ	シク	1	0	1	56	0	58
いちじし	シク	0	0	0	2	0	2
いやし	シク	0	3	2	30	0	35
いらんがまし	シク	0	0	1	0	0	1

辛島美絵

さまざまし	シク	0	0	0	1	0	1	かゆし	ク	0	0	0	1	0	1
さむし	ク	0	0	0	12	1	13	からし	ク	0	0	1	0	0	1
さもさもし	シク	0	0	0	1	0	1	かるし	ク	1	3	5	11	2	22
さわがし	シク	0	0	0	8	0	8	かろがろし	シク	0	0	0	1	0	1
しげし	ク	2	1	0	25	0	28	かろし	ク	1	2	1	22	0	26
しさいなし	ク	0	0	8	4	0	12	かんばし	シク	0	0	0	0	1	1
したし	シク	1	1	15	8	2	27	がたし/接尾語	ク	12	64	30	377	36	519
しだいなし	ク	0	1	0	0	0	1	きたなし	ク	0	0	0	8	0	8
しどけなし	ク	1	2	2	2	1	8	きつし	ク	0	0	1	0	0	1
しょうたいなし	ク	0	1	0	12	0	13	きぶし	シク	1	0	3	6	0	10
しるし	ク	0	2	0	0	0	2	きぶし	ク	0	1	0	0	0	1
しるしなし	ク	0	1	0	2	0	3	きゅうきゅうし	シク	0	0	0	1	0	1
しれがまし	シク	0	0	0	1	0	1	きよし	ク	0	0	0	17	0	17
しろし/白	ク	0	4	0	16	0	20	きらきらし	シク	0	0	0	3	0	3
じゅつなし	ク	0	6	0	3	0	9	きわなし	ク	0	0	0	0	1	1
すくなし	ク	0	7	3	69	7	86	きわまりなし	ク	0	6	0	40	1	47
すこし	シク	1	4	3	19	1	28	くさし	ク	0	0	0	2	0	2
すごし	ク	0	0	0	1	0	1	くぜちがまし	シク	0	1	0	0	0	1
すさまじ	シク	0	0	0	2	0	2	くちおし	シク	0	1	1	22	2	26
すずし	シク	0	1	0	8	0	9	くぼし	ク	0	1	0	3	0	4
すべなし	ク	0	0	0	1	0	1	くまなし	ク	0	0	0	1	0	1
せばし	ク	0	0	3	14	0	17	くやし	シク	1	2	0	7	0	10
せんなし	ク	0	4	3	20	0	27	くらし	ク	0	0	0	15	0	15
ぜひなし	ク	0	0	0	2	0	2	くるし	シク	1	0	2	57	2	62
そうぞうし	シク	0	0	0	1	0	1	くろし	ク	0	0	0	8	0	8
そうなし	ク	2	10	5	48	1	66	くわし	シク	5	34	50	214	4	307
そねまし	シク	0	0	0	1	0	1	けあし	シク	0	0	1	0	0	1
そのこととなし	ク	0	0	1	0	0	1	けがらわし	シク	0	0	0	1	0	1
そのゆえとなし	ク	0	0	0	1	0	1	けぎたなし	ク	0	0	0	1	0	1
そんがまし	シク	0	0	0	1	0	1	けし	シク	0	1	0	2	0	3
たいらけし	ク	7	0	0	0	2	9	けだかし	ク	0	0	0	1	0	1
たえなし	ク	0	1	1	0	0	2	けわし	シク	0	0	0	3	0	3
たかし	ク	6	2	0	43	4	55	げにげにし	シク	0	1	0	8	0	9
たぐいなし	ク	0	0	1	1	0	2	こいし	シク	0	0	0	25	0	25
たけし	ク	0	0	0	4	0	4	こうばし	シク	0	1	0	3	2	6
ただし	シク	1	0	1	7	0	9	こちなし	ク	0	0	0	1	0	1
ただし?まさし?	シク	0	0	2	6	2	10	こころうし	ク	0	3	1	22	0	26
たっとし	ク	0	0	1	3	0	4	こころかしこし	ク	0	0	0	1	0	1
たてだてし	シク	0	0	0	2	0	2	こころぐるし	シク	1	0	6	46	2	55
たのし	シク	0	2	0	8	3	13	こころせばし	ク	0	0	0	2	0	2
たのみなし	ク	0	0	4	2	0	6	こころづよし	ク	0	0	0	2	0	2
たのもし	シク	0	1	0	52	0	53	こころながし	ク	0	0	0	1	0	1
たのもしし	シク	0	0	0	2	0	2	こころなし	ク	0	0	0	8	0	8
たやすし	ク	0	4	4	19	4	31	こころにくし	ク	0	1	1	3	0	5
たゆし	ク	0	0	0	2	0	2	こころふかし	ク	0	0	0	1	0	1
ちいさし	ク	0	0	0	9	0	9	こころぼそし	ク	0	0	0	11	0	11
ちかし	ク	0	9	6	39	7	61	こころもとなし	ク	0	1	1	92	0	94
ちからなし	ク	0	2	2	18	2	24	こころやすし	ク	0	1	16	36	1	54
ちさし	シク	0	0	1	0	0	1	こころよし	ク	0	1	2	2	0	5
つたなし	ク	0	0	0	7	5	12	こころよわし	ク	0	0	1	0	0	1
つつがなし	ク	2	1	0	2	2	7	こざかし	シク	0	0	0	1	0	1
つつまし	シク	0	0	0	3	0	3	こし	ク	0	0	0	2	0	2
つめたし	ク	0	0	0	6	1	7	こちなし	ク	0	0	0	2	0	2
つよし	ク	0	4	1	50	1	56	ことごとし	シク	0	0	0	10	0	10
つらし	ク	0	0	0	5	0	5	ことなし	ク	0	0	0	2	0	2
つれなし	ク	0	0	0	3	0	3	ことやすし	ク	0	0	0	1	0	1
てづよし	ク	0	0	0	0	1	1	ことゆえなし	ク	0	0	0	8	0	8
とうとし	ク	0	1	3	64	2	70	ことわずらわし	シク	0	0	0	1	0	1
とおし	ク	3	6	7	22	6	44	こわし	ク	0	1	0	5	0	6
ところせし	ク	0	0	0	10	0	10	さかさかし	シク	0	0	0	2	0	2
とし/疾	ク	4	3	3	112	4	126	さかし	シク	0	0	0	4	0	4
とし/利	ク	0	0	0	2	0	2	さがし/険	シク	0	0	0	0	1	1
とぼし	シク	0	0	0	2	0	2	さたがまし	シク	0	0	0	1	0	1
ともし	シク	0	0	0	9	1	10	さたなし	ク	0	2	3	9	0	14
なおし/ク	ク	0	0	0	4	0	4	さだめなし	ク	0	0	2	1	0	3
なおし/シク	シク	0	0	0	3	0	3	さひろし	ク	0	0	0	1	0	1
なかなかし	シク	0	0	0	1	0	1	さびし	シク	0	0	0	1	0	1

仮名文書の形容詞 (一)

みぐるし	シク	0	3	2	9	0	14	なかよし	ク	0	0	3	0	0	3
みじかし	ク	0	0	0	7	0	7	ながし	ク	8	27	225	49	71	380
みだりがわし	シク	0	3	0	2	0	5	なげかし	シク	0	0	0	15	0	15
みにくし	ク	0	0	0	2	0	2	なげかし?なげかわし?	シク	0	0	0	2	0	2
みみかしこし	ク	0	0	0	1	0	1	なげかわし	シク	0	0	0	1	0	1
むつかし	シク	0	1	8	18	0	27	なごりおし	シク	0	0	0	1	0	1
むつまし	シク	0	0	0	1	0	1	なさけなし	ク	0	0	0	3	1	4
むなし	シク	1	3	8	66	12	90	なし	ク	124	450	624	1673	189	3060
めかしこし	ク	0	0	0	1	0	1	なつかし	シク	0	2	0	7	0	9
めざまし	シク	0	0	0	1	0	1	なにとなし	ク	1	2	3	28	0	34
めずらし	シク	0	0	0	24	0	24	なにともなし	ク	0	0	0	1	0	1
めでたし	ク	14	8	9	160	9	200	なれなれし	シク	0	0	0	2	0	2
めんぼくなし	ク	0	0	1	3	0	4	にがし	ク	0	0	0	1	0	1
もうしやるかたなし	ク	0	0	0	3	0	3	にがにがし	シク	0	0	0	1	0	1
もうすかぎりなし	ク	0	0	0	8	0	8	にくし	ク	0	2	1	9	1	13
もうすばかりなし	ク	1	0	0	86	0	87	にくし/接尾語	ク	0	0	2	7	0	9
もうもうし	シク	0	0	0	1	0	1	になし	ク	1	0	0	0	0	1
もったいなし	ク	1	0	2	21	0	24	ねがわし	シク	0	0	0	1	0	1
ものあさなし	ク	0	1	0	0	0	1	ねがわしし	シク	0	0	0	0	1	1
ものうし	ク	0	0	0	7	0	7	ねたまし	シク	0	0	0	1	0	1
ものくさし	ク	0	0	0	1	0	1	ねんなし	ク	0	0	0	2	0	2
ものぐるおし	シク	0	0	0	1	0	1	のうがまし	シク	0	0	0	2	0	2
ものぐるわし	シク	0	0	0	3	0	3	のこりなし	ク	0	0	1	3	0	4
ものさわがし	シク	0	0	1	1	0	2	のまとし	シク	0	0	0	1	0	1
もろし	ク	0	0	0	1	0	1	のろし	ク	0	0	0	1	0	1
やさし	シク	0	0	0	4	0	4	はえばえし	シク	0	0	0	1	0	1
やすし	ク	3	8	0	29	3	43	はかなし	ク	0	1	0	34	0	35
やすし/接尾語	ク	0	0	0	23	1	24	はかばかし	シク	0	1	2	7	0	10
やすらげし	ク	4	0	0	0	2	6	はげし	シク	0	0	0	9	0	9
やるかたなし	ク	0	0	0	1	0	1	はしたなし	ク	0	0	0	1	0	1
やんごとなし	ク	0	0	0	1	0	1	はじがまし	シク	0	0	0	4	0	4
ゆいし	シク	0	0	0	1	0	1	はずかし	シク	0	0	0	7	0	7
ゆえなし	ク	3	5	3	8	0	19	はなはだし	シク	0	0	0	1	0	1
ゆかし	シク	0	0	0	13	0	13	はやし	ク	14	43	18	75	23	173
ゆめがまし	シク	0	0	0	6	0	6	はらあし	シク	0	0	0	5	0	5
ゆゆし	シク	0	7	1	22	0	30	はらぐろし	ク	0	2	0	1	0	3
ゆるし	ク	0	1	1	4	0	6	はるけし	ク	0	1	0	1	0	2
ゆわし	ク	0	0	0	5	0	5	ひきし	ク	0	0	0	5	0	5
よいよいし	シク	0	0	0	1	0	1	ひさし	シク	1	1	11	73	18	104
よし	ク	5	26	18	260	6	315	ひさしし	シク	0	0	0	1	0	1
よしなし	ク	0	0	1	11	0	12	ひだるし	ク	0	0	0	1	0	1
よろこばし	シク	0	0	0	6	0	6	ひとげなし	ク	0	0	0	2	0	2
よろし	シク	7	2	4	29	12	54	ひとし	シク	0	0	0	42	4	46
よわし	ク	2	1	1	29	0	33	ひとびとし	シク	0	0	0	1	0	1
よわよわし	シク	0	0	2	4	0	6	ひろし	ク	4	3	6	30	6	49
わいなし	ク	0	0	0	1	0	1	びんなし	ク	0	0	0	4	0	4
わかし	ク	1	1	1	27	0	30	ふかし	ク	6	20	31	170	42	269
わずらわし	シク	0	1	7	34	0	42	ふせかし	シク	0	0	0	1	0	1
わびし	シク	0	2	5	21	0	28	ふとし	ク	0	0	0	1	0	1
わりなし	ク	0	0	0	2	0	2	ふるし	ク	0	1	7	19	5	32
わるし	ク	0	1	4	26	0	31	ほいなし	ク	0	0	2	26	1	29
わろし	ク	1	3	3	50	0	57	ほし	シク	1	3	1	13	0	18
合計		424	1957	1900	7919	666	12866	ほそし	ク	0	0	0	6	0	6
								ほそながし	ク	0	0	0	1	0	1
								ほつなし	ク	0	0	0	1	0	1
								ほどなし	ク	0	1	1	7	1	10
								ほねなし	ク	0	1	0	1	0	2
								まぎらわし	シク	0	0	0	3	0	3
								まことし	シク	0	0	1	7	0	8
								まさし	シク	1	3	2	9	0	15
								まさなし	ク	0	0	0	1	0	1
								まざし	シク	0	0	0	1	0	1
								またし	ク	5	7	32	3	4	51
								まったし	ク	0	1	9	0	0	10
								まったく?またし?	ク	1	26	26	12	4	69
								まろし	ク	0	0	0	1	0	1

<別表3> 「なし」「おなじ」「かしこし」の文書類別頻度数

見出し語	下達	上申	証文	書状	神仏	合計
なし	124	450	624	1673	189	3060
%	29.2	23.0	32.8	21.1	28.4	23.8
おなじ	54	886	302	252	29	1523
%	12.7	45.3	15.9	3.2	4.4	11.8
かしこし	60	25	152	550	21	808
%	14.2	1.3	8.0	7.0	3.2	6.3
全形容詞述べ語数	424	1957	1900	7919	666	12866

〈別表2〉

	鎌倉遺文		日記		随筆		説話		軍記		史書		物語					
	頻度	% 順位	頻度	% 順位	頻度	% 順位	頻度	% 順位	頻度	% 順位	頻度	% 順位	頻度	% 順位				
なし	3060	23.8 1	401	10.8 1	353	17.6 1	284	7.98 3	349	21.9 1	714	16.8 1	1567	18.3 1	221	13.2 1	3552	14.7 1
おなじ	1523	11.8 2	7	0.19 98	48	2.4 3	45	1.26 12	25	1.57 9	112	2.64 6	444	5.17 2	87	5.18 3	371	1.54 12
かしこし	808	6.28 3	17	0.46 52	4	0.2 100	32	0.9 23	10	0.63 32	39	0.92 21	12	0.14 106	42	2.5 8	150	0.62 35
かたし/接尾語	519	4.03 4	27	0.73 30	47	2.35 4	3	0.08 115	33	2.07 6	125	2.94 4	95	1.11 17	14	0.83 24	397	1.65 11
ながし	380	2.95 5	20	0.54 44	16	0.8 24	24	0.67 30	11	0.69 26	20	0.47 41	62	0.72 28	14	0.83 24	120	0.5 44
よし	315	2.45 6	99	2.67 5	13	0.65 30	179	5.03 4	111	6.98 2	95	2.24 8	250	2.91 4	77	4.58 4	603	2.5 3
くわし	307	2.39 7	4	0.11 139	0	0 248	0	0 228	1	0.06 140	5	0.12 125	35	0.41 56	5	0.3 49	73	0.3 78
おおし/多	301	2.34 8	73	1.97 8	32	1.6 12	70	1.97 8	89	5.59 3	125	2.94 4	249	2.9 5	53	3.15 6	600	2.49 4
ふかし	269	2.09 9	46	1.24 14	41	2.05 6	16	0.45 46	28	1.76 7	210	4.95 2	273	3.18 3	9	0.54 37	495	2.05 7
めでたし	200	1.55 10	23	0.62 38	7	0.35 61	139	3.91 5	18	1.13 12	73	1.72 10	77	0.9 21	56	3.33 5	222	0.92 23
はやし	173	1.34 11	15	0.4 61	2	0.1 134	12	0.34 60	7	0.44 43	36	0.85 25	39	0.45 50	6	0.36 42	38	0.16 113
あし	145	1.13 12	53	1.43 10	9	0.45 47	43	1.21 14	18	1.13 12	59	1.39 12	107	1.25 15	29	1.73 12	138	0.57 39
あさまし	130	1.01 13	54	1.45 9	34	1.7 11	29	0.81 25	13	0.82 19	42	0.99 20	65	0.76 27	34	2.02 10	212	0.88 25
とし/疾	126	0.98 14	38	1.02 18	17	0.85 23	67	1.88 10	9	0.57 36	21	0.49 39	52	0.61 37	25	1.49 14	102	0.42 56
うれし	125	0.97 15	22	0.59 40	28	1.4 15	39	1.1 18	8	0.5 42	25	0.59 33	95	1.11 17	16	0.95 23	235	0.97 21
おぼつかなし	112	0.87 16	41	1.1 16	11	0.55 39	11	0.31 65	11	0.69 26	27	0.64 32	47	0.55 41	4	0.24 58	140	0.58 37
ひさし	104	0.81 17	28	0.75 28	13	0.65 30	35	0.98 20	17	1.07 16	46	1.08 17	70	0.82 23	13	0.77 27	144	0.6 36
ありがたし	103	0.8 18	1	0.03 255	6	0.3 68	5	0.14 97	11	0.69 26	50	1.18 15	66	0.77 26	8	0.48 39	120	0.5 44
こころもとなし	94	0.73 19	20	0.54 44	6	0.3 68	23	0.65 31	1	0.06 140	5	0.12 125	19	0.22 89	2	0.12 97	87	0.34 67
むなし	90	0.7 20	3	0.08 160	39	1.95 8	0	0 228	6	0.38 54	47	1.11 16	125	1.46 11	1	0.06 134	39	0.16 112
全形容詞延語数	12866	100	3713	100	2002	100	3559	100	1591	100	4245	100	8586	100	1680	100	24127	100

築業書
併

仮名文書の形容詞（一）

〈別表4〉「なし」の活用形

		語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	合計
『鎌倉遺文』	下達	0	1	50	20	29	0	24	124
	%	0	0.8	40.3	16.1	23.4	0	19.4	100
	上申	0	2	122	236	83	6	1	450
	%	0	0.4	27.1	52.4	18.4	1.3	0.2	100
	証文	0	15	398	95	106	6	4	624
	%	0	2.4	63.7	15.2	17	1	0.6	100
	書状	0	39	684	482	351	63	54	1673
%	0	2.3	40.9	28.8	21	3.8	3.2	100	
神仏	0	12	81	69	23	0	4	189	
%	0	6.3	42.9	36.5	12.2	0	2.1	100	
合計	0	69	1335	902	592	75	87	3060	
%	0	2.3	43.6	29.5	19.3	2.5	2.8	100	
日記中古	0	9	166	78	113	35	0	401	
%	0	2.2	41.4	19.5	28.2	8.7	0	100	
日記中世	0	5	134	66	98	50	0	353	
%	0	1.4	38	18.7	27.8	14.2	0	100	
説話中世	1	11	310	217	114	45	16	714	
%	0.1	1.5	43.4	30.4	16	6.3	2.2	100	
伊勢・平中・大和	0	2	66	37	32	8	0	145	
%	0	1.4	45.5	25.5	22.1	5.5	0	100	

*「日記中世」「日記中古」「説話中世」は（注3）の文献と同様で、「伊勢・平中・大和」は（注3）の「物語中古」のうちの歌物語3作品である。活用形の統計が取りやすかったので参考までにあげた。

〈別表7〉書止めの「かしこし」語幹が見える文書

文書の分類	細分類	『鎌倉遺文』仮名文書数	用例の見える文書数	%
下達	院宣	19	13	68.4
	奉書	35	8	22.9
	令旨	10	5	50
	女房奉書	11	5	45.5
	武家御教書	22	5	22.7
	綸旨	3	2	66.7
	施行状	2	1	50
	摂関家御教書	4	1	25
	諸家御教書	6	1	16.7
	書下	18	1	5.6
上申	下知状	30	1	3.3
	下文	34	1	2.9
	申状	109	4	3.7
証文	起請文	91	3	3.3
	請文	140	3	2.1
	拳状	3	2	66.7
	送文	55	1	1.8
	譲状	891	64	7.2
	置文	126	18	14.3
	売券	454	7	1.5
書状	去状	54	3	5.6
	請取状	85	2	2.4
	契約状	34	1	2.9
	借券	42	1	2.4
	書状	2156	345	16
神仏	寄進状	139	8	58
	願文	97	1	1
『鎌倉遺文』仮名文書全体		5900	507	8.6

〈別表5〉「違乱」「相違」「妨げ」「退転」「煩い」に下接する「なし」

	下達	上申	証文	書状	神仏	合計
違乱なし	0	0	16	0	0	16
相違なし	10	22	103	46	10	191
違乱相違なし	0	0	2	0	0	2
妨げなし	1	0	118	2	4	125
違乱妨げなし	0	0	1	0	0	1
退転なし	1	0	7	5	3	16
煩いなし	0	4	19	3	1	27
違乱煩いなし	0	0	3	0	0	3
合計	12	26	269	56	18	381

〈別表6〉「おなじ」の連体法の文書別整理

		おなじ	おなじき	おなじかる	合計
文書の種類別	下達	3	7(4)	0	10
	上申	29	9(1)	0	38
	書状	61	10(1)	4	75
	証文	31	60(0)	2	93
	神仏	0	5(0)	0	5
	合計	124	91(6)	6	221
文字別	「ひらがな」書き文書	52	63(5)	2	117
	「漢字+ひらがな」書き文書	60	25(1)	4	89
	「漢字+カタカナ」書き文書	12	2(0)	0	14
	「漢字+カタカナ+ひらがな」書き文書	0	1(0)	0	1
	合計	124	91(6)	6	221

* 活用語尾が明確な用例のみをあげた。
（ ）の数字は年月日に続く例。